

谷崎家・江沢家とブラジル

——訂正と追加——

細江 光

昨年、本誌四十六号に掲載した「谷崎家・江沢家とブラジル」で、私は林伊勢氏の「叔母の死」を引用したが、当時はその全文を入手できず、不完全なコピーに拠って書いた為、誤りが生じた。その後、ブラジルの日本移民資料館の御好意によって、全文を入手できたので、以下のように訂正と追加をさせて頂く。

①「甲南園文」一九二ページ上段後ろから三行目末尾から二行目にかけての《恐らく九月末か、十月中に出航したのであろう。》を削除し、一九三ページ上段後ろから五行目から下段六行目までを次のように変更する。

* * *

この当時、日本からブラジルへは、船で一ヶ月半から二ヶ月程かかったから、二人は九月の末か十月初めに出版して、十一

月中旬に着いたと考えられる。

「叔母の死」(パウリスタ新聞)第7525号(1979/3/28)六面)によれば、ブラジルに着いた直後、伊勢がサントスからルスの駅に降りた途端、谷崎平次郎の妻なかつと思ひ掛けず邂逅し、「平次郎は馴れない百姓仕事で借銭が重なり、その返済のために一時日本に帰国している、その留守中に、なかの父江沢藤右衛門は危篤状態になった、あなたが来ると分かっていたら止めたのに」と言われた。丁度その話の最中に、なかの兄(齊次郎)の子で十五、六(二男普二、明治四十四年一月二十七日生まれ)と十二、三(三男桂三、大正三年十一月三日生まれ)の二人の少年が、藤右衛門の死を報せに来た。伊勢は翌日、藤右衛門の葬儀に参列した。後述するように、藤右衛門の死は大正十五年十一月二十一日であるから、伊勢のブラジル

到着は、その数日前と推定できる。

②「甲南国文」二二二ページ下段後うから四行目と五行目の間に、次の一段落を挿入する。

* * * * *
また、伊勢の「叔母の死」によれば、齊次郎一家は谷崎平次郎一家と一緒に渡伯し、同じ耕地に居たのだが、家族全員が風土病に冒され、労働に従事できなくなり、雇用者側も契約農年を免除してくれたので、藤右衛門死亡当時は既にサンパウロ市で生活していたと言う。

③また、「谷崎家・江沢家とブラジル」を発表した後、江沢千恵さんからのお電話で、若干の御叱正を得た。よって、「甲南国文」二二三ページ上段九行目から十三行目までは、次のように変更する。

* * * * *
また、齊次郎の妻・久子と長男・栄一は、第二次大戦中に交換船で日本に永住帰国し、共に八十一才まで生きたと言う。千恵さんによれば、この交換船はイタリアの船で、ポルトガルのロレンソ・マルケスを経由して日本へ帰った。

④やはり江沢千恵さんからのお電話によって、「甲南国文」二二三ページ上段末尾に、次の一文を追加する。

* * * * *
谷崎正男（谷崎平次郎・なか夫妻の三男）が商用で日本に来て、食事会をした時には、潤一郎の娘・鮎子さんも来た。
末尾ながら、ブラジル日本移民資料館と江沢ちえさんに、あらためて感謝の意を表します。